

しをうかがう機会を、幾度となく設けているのは、まさにその裏返しなのである。積極的な眼差しが医書に向けられようとしていると聴いて、心の中で小躍りした。その具現が本書であるとみれば、大きな流れを感じずにはいられない。このことを本書の特徴の第一にあげたい。

本書の第二の特徴は、筆者あとがきに「道家思想・神仙思想・道教との関係に重点を置いた」とあるように、道教の目で、『素問』『靈枢』に取り組んだということである。単に、中国思想の専門家、大学の先生が『素問』『靈枢』に取り組んだ、それだけではない。今までになかった切り口からの解説および注釈が、本書の大きな特徴である。この試みは同学のものも啓発するとともに、示唆的でもある。臨床の目だけで古典を読むだけではなく、あらゆる角度からアプローチすべきことを本書は暗に示している。思想的な背景を無視して、医書であるからといって視野を狭め臨床の側面だけで読むことは、戒めなければならない。これが特徴の第二である。

中国伝統医学はしばしば「氣」ということばを用いる。これが、どれだけ初学者の障害になっているか。たとえば、九針十二原篇の補瀉の段。原文には「邪氣」「氣」「其氣」「中氣」と氣のつく語が四見するが、本書の現代語訳には「邪氣」「真氣」「邪氣」「血氣」「邪氣」「氣」「経氣」「正氣」「正氣」と九見し、増えている。この「氣」の不統一は著者だけの問題ではない。中国伝統医学の内でも久しく論議されてきたことで、今もって明解は得られていない。「経氣」「正氣」「真氣」がど

ういう風に違うのかを明確にする必要がある。これが問題の第一である。

雑誌『経絡治療』に登載された丸山昌朗氏の「九針十二原講」、『日本経絡学会誌』の島田隆司氏の「九針十二原の研究」、同じく井上雅文氏の「九針十二原・補瀉条文の検討」などが参考文献に加えられていないことは、まことに残念である。アカデミーからみれば、こうした研究は埋もれて見つけにくいことが大きな原因だろう。アカデミーと臨床家でありながら研究している者との密接な交流、もしくは交流の場の確保、このことは急務ではないだろうか。これが問題の第二である。本書が医学古典の研究に一石を投じたことを強調するあまり、具体的な内容についてあまり触れることができなかった。誤字が散見するが、道教からの解説・注釈、およびその博引傍証のさまを、是非一読されたい。

(宮川 浩也)

〔明徳出版、新宿区新小川町八一二六、電話三二六六一〇四〇〕  
一、一九九四年、四六判、二二〇頁、定価二七〇〇円〕

### 新藤恵久著『木床義歯の文化史』

—世界に先駆けた日本の職人藝—

木床義歯は歯科医学史に興味をもつものには一度はふれてみたいテーマである。

日本の文化でも科学でも、大抵はそのモデルやルーツは外国にあって、それが取込まれて実を結んでいるという中で、

古い中国にも、西洋にも全くこういう形の痕跡も見当らない。「木床義歯」は文化史的にも注目すべきテーマであり得る。

もちろん義歯という発想は古くからあったようであるが、西洋ではとくに上顎の義歯は、下顎のものにバネでつなぐか、あるいは吸着盤のようなものを用いて保持して、という発想から出発して、上顎のものでもよく適合していれば全体として吸着するものだというところに行きついたのは十九世紀に入ってからであった。

ところが、日本の職人たちはすでに十六世紀のおわりごろには、経験的にそんな発想から木床義歯に行きついている。

それでいて、現在の歯科補綴学は吸着盤やバネの発想から発展したいわゆる西洋歯科医術によって支えられている。

しかし木床義歯はそんなに古いものではなく、明治三十年代にはごく少数ではあっても実際にそれをつくっていた人のあったこともわかっている。

ところが昭和二年、柳生家の墓地から木床義歯が見出されたときは大きなトピックスとなり、それをきっかけとして注目をあびたのであった。

実際にそのころから木床義歯についてのエッセイやトピックスがたくさん提供されているが、実証的に論及したものは乏しい状態であった。

昭和三十七、八年になって大阪歯科大学の小野寅之助教授指導の下で、渡部凡夫・井田勝造の二氏がつくった論稿がはじめてのものであったとも言える。因みにこの二編は学位論

文ともなった。

こうした中で、著者は、木床義歯へのとりくみを、素材である「木」に着目してそこから入っている。

木という素材が日本文化と深いかわりをもつというところから仏師に近づき、仏像に当たっている。

そんな中で和歌山の中岡テイ―仏姫―の義歯の素材・ツゲの追及から和歌山県下のツゲ産地を渉猟し、しつこく岡山・広島・四国・九州とツゲを追い、御蔵島にたどりつく。

そこでは著者の追及が意外な絵島生島のエピソードを発掘することになったりする。

しかし一方で著者は仏師とのかかわりで木版における内割りに着目し、また木床義歯製作にかかわる印象採得の材料としての蜜蠟にも目をくばっている。

そんな一方でいわゆる入歯師の生態についても目をくばり、「入歯師列伝」という他にあまり類例のないものをまとめている。

専門外の人を視野に入れて木床義歯をとりあげるとき、興味本位だけでトピックスをひろいあげることはわりに容易であるが、それと実証的な裏付けとをどう調和させるかは大変難しい課題になるが、著者はそれをうまく混ぜ合わせながら、著者のしつこいまでの実証精神にふれさせてくれる。

興味深いのは「義歯を木でつくる」という着想が、そんなに突飛もないことではない、というエピソードが最後に加えられていることである。

あの第二次世界大戦後のシベリアのラーゲルのきびしい条件の下で、木彫家の手でつくられた白樺の「木床義歯」の話である。

これはそれにかかわった歯科医師の中村喜一、高木一郎の両氏は現に活躍中の方であるし、その作成に直接に当られた木彫家の山本雅彦氏も九十歳を越えているが健在である。

これは著者の仮説の「木床義歯のルーツは仏師の木彫技術である」というものの実証的なエピソードとして結びにふさわしいものであると思う。

関心をもつ方の一読をおすすめする次第である。

(榊原悠紀田郎)

〔デントアルフォーラム社・東京都千代田区神田多町二―四傘長ビル、電話〇三―三三五六―五八八六、平成六年四月、B5判・一八六頁、二二、〇〇〇円〕

エドワード・クック著、中村妙子・友枝久美子訳

『ナイチンゲール「その生涯と思想」I』

フロレンス・ナイチンゲールは、一八二〇〜一九一〇年の九〇年間、最盛期の大英帝国、ヴィクトリア女王時代を生きた傑出した女性である。

原著はナイチンゲールの没後間もない一九一三年に出版され、たちまちベストセラーになったが翻訳は八〇年ぶりである。二〇数年前に私は原著を手に入れ、看護関係の出版社に

翻訳を依頼したのであるが実現せず今日に至った。

ナイチンゲール研究の基ともなるこの伝記の入手が困難なことは研究をはばむものでもあり、また多忙のなかを原著を読むのも仲々苦労がある。ナイチンゲール研究の盛り上がりつつある昨今翻訳され、尚名訳で出版されたことは時宜を得ていて真に嬉しく、時空出版や関係者の方々から心からの御礼を申し上げたい。

本書は、ナイチンゲール自身が残した膨大な資料を中心に、彼女を直接知っている人々や、親交のあった人々からの資料、情報提供を裏づけ資料で確認しつつ実像に迫った伝記である。

原著は全三巻であるが、翻訳は全三巻である。

第一巻は二部にわかれ、第一部 志(一八二〇〜五四)、第二部 クリミア戦争(一八五四〜五六)で構成されている。

第一部 志(全十章)では、ナイチンゲールが属した上流階級のありよう。豊かな感受性と、すぐれた才能をもつ生き生きとした少女が、その階級のなかで恵まれた人的交流、さまざまな体験、上流階級の社会的責任を自覚しつつ、自己の使命は何かと模索しつつ女性へと成長してゆく過程が克明に描かれている。

宗教的思想については私は知識も乏しく、共感も充分とはいえないが理解はできる。

自己に課せられた召命が、看護への道であると悟ったとき、その当時の看護婦をみれば必然的に家族に逆うことになり、